

地域から。

第12回

助産院を中心に つながりが広がっていく。

text : Reiko Hisashima

活気がある地域には、中核となる人や場所がある。有機農業に取り組んでいる人や伝統工芸に新しい風を吹き込んでいる人、新しい地域ビジネスを興した人……。場所も古い建物をリフォームしたものであったり、公共施設だったり、その地域によって異なってくる。しかし、「出産」をとおして地域づくりを考えると、というのはあまり聞いたことがないが、そんな大きな夢をもって助産院を営んでいるのが矢島助産院の矢島床子さんだ。

矢島助産院は、JR国分寺駅から徒歩5分ほどの静かな住宅地の中にある。外観も間取りも普通の住宅だけれど、そこには妊娠中や出産後の女性やその家族たちが通ってくる。矢島さんは、病院での管理されたお産ではなく、女性の生理に沿った自然で健康なお産を手伝ってきた。

「助産師として、お産は自由でいいと伝えてきました。自由に産むためには、(出産時に)妊婦さんをひとりにせず、触れて、どんなことも否定しない。そうやって妊婦さんに助産師が寄り添っていくことで、リラクセスでき、子どもが生まれてくることを身体

全体で感じることができません。お産って、とっても幸せなものなんだ、と妊婦さんもご家族も感じてくれます」
しかし、幸せなお産が、そのまま幸せな育児につながるには限らない。「子どもを育てるといっては、並大抵のことではない。子どもを産むことは女性にしかできないことですが、母になるためには、多くの人の助けがいりますし、人との関わり合い、触れ合いが必要なんです」

助産院の近くで育児ノイローゼ



だった女性が自殺したときは、「なぜ、自分のところにきてくれなかったのか、なぜ自分は助けることができなかったのか」と思い悩んだそう。出産した後の母子がそのまま地域の中でいい子育てができるサポートもできたら……。いつしか矢島さんは、そんな思いを抱くようになった。それを

矢島さんは「パースセンター構想」と呼んでいる。

「パースセンターの食事は、近隣で安全に育てられた食材。助産院を訪れる家族のためのお店やホテルができ、出産後のケアをする鍼灸やアロマ、整体のサロンができ、お母さんたちの交流の場や保育園も必要ですよね。パースセンターは、助産師を育てる教育の場であると同時に、医師が出産を学ぶ場にもなります。パースセンターを中心に人が集まり、さまざまな活動が生まれ、自然発生的に街が生まれる。そうなったら、いいじゃないですか」

目をきらきらと輝かせる矢島さん。実際、矢島助産院には、出産前のママ、パパ向けの学習会やマタニティヨガ、食の講習会などを行うウイメンズサロン、産前産後の家族をサポートするメニューの揃ったファミリーサロンという分室があり、お産だけでなく、そこから広がる女性とその家族を心身ともにサポートできるようになっている。府中市で産婦人科医院を開業し、矢島助産院とも提携している土屋清志さんも、矢島さんのパースセンター構想に影響を受け、同じような意思をもって地域と関わっている。

この構想には、政治や行政の関心も高いようだが、矢島さんは「歩みは遅くても、草の根からつくりあげていきたい」と語る。「産む」ことを中心にすれば、人間的な街づくりができるんじゃないでしょうか」。

KEY PERSON

FILE 12

矢島床子

Yukako Yajima

1945年岐阜県生まれ。70年日本赤十字社助産婦学校卒業、日本赤十字社産院(現・日赤医療センター)、高山赤十字病院などを経て、81年からラマーズ法を広めた三森助産院勤務。87年独立、出張分娩のみの開業助産婦活動をスタート。90年東京・国分寺市に「母と子のサロン矢島助産院」開業。以来4000人以上の赤ちゃんを取り上げ、親子2代にわたって出産する人もいほど信頼されている。還暦を過ぎても、まだまだ現役で、母と子のために奮闘中。著書「助産婦・矢島床子」「フィリング・パース」など。